

人と人
つながりの物語

illustration: Maiko Dake

コープデリグループの組合員数は約530万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。

2024年1月1日に令和6年能登半島地震が発生、大きな被害を受けた石川県の生協であるコープいしかわへの援助のため、*日本生協連が舵を取り、全国の生協職員がリレー式でボランティア活動に訪れた。

37歳の加藤雄太郎さんは、18歳でとちぎコープに入職し19年が経つ。人生の半分、コープで仕事をしてきた。現在は宅配の安全運転トレーナーで、職員への安全運転教育や研修、同乗指導、ドライブレコーダーの点検などが普段の仕事だ。加藤さんは今回、コープいしかわの宅配業務を支援するボランティア第2陣として約1週間を現地で活動した。

「1月21日の日曜日から金沢市に滞在し、翌日から5日間毎朝車で約1時間半かけて、のとセンター（七尾市）へ通いました。想像していたよりも被害の範囲は広がった。まだ震度4くらいの余震も起きていました。派遣された地域はもっとも被害の大きい町ではなかったのに、地割れや、部屋の中がめちゃくちゃになってしまった家屋などもありました」

加藤さんの主な役割は、コープいしかわの30代女性職員・新さんの配達同乗だった。新さん自身も被災して避難所生活を送っており、避難所から宅配センターへ通勤していた。加藤さ

んのボランティア初日が、新さんの仕事復帰日でもあった。「新さんは、前向きでとても明るい人でした。前職が介護職で、避難所では介護のお手伝いもしていたようです。毎週会っていた組合員の皆さんが被災しているのでも心配で、この日から仕事に戻ったということでした」

……§……

新さんは「自分も復帰初日だから、仕事を手伝ってもらえてとても心強い」と加藤さんに言った。配達エリアは地割れで通行止めの道もあり、200メートルくらい離れたところにトラックを止めることもあった。加藤さんは主に配達する商品運び、新さんの仕事を手伝った。

「配達と同時に、組合員の皆さんにペットボトルの水を配っていました。配達したエリアは断水はしていませんでしたが、水道水はまだ飲まないでくださいと言われていました。それなのに、先々で水を差し上げようとすると、多くの組合員さんが「断水しているエリアの方々がもっと大変だから、そちらに持って行ってあげて」と断るんです。人に対しての思いやりの気持ちを目のあたりにしました。組合員の皆さんは、新さんのことを心配していて、「大丈夫だった？」といった会話がほとんどでした」

新さんを含め、のとセンターの職員たちは全体的に明るかった。「単純にすごいな、みんな強いなって思いました」と加藤さんは回想する。

5日間のボランティア活動を終え、加藤さんは土曜日に自宅へ帰った。

そもそも、加藤さんがボランティア活動を始めたのは、2011年東日本大震災発生後のことだった。「宮城県南三陸町に友達がいまして、個人的にも複数回ボランティア活動で訪れました。そのときも今回も、自分が行ったところでも今も、自分が行ったところでもどうにかなるとは思いません。だけど、自分のためでもあるんです。万が一身近なところで自然災害が起きたとしても、きちんと行動できる自分でありたいんです」加藤さんはそう言って、少し恥ずかしそうに笑った。

人のやさしさや強さを身近に見て触れて、人間は成長できるのだと考える加藤さんは、それだけですぐに素敵な人だ。

※……日本各地の生活協同組合や生協連合会が加入する全国連合会。正式名称は日本生活協同組合連合会

過去の物語も
こちらから読めます



あなたのエピソードを
お寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便(〒336-8526 埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛)か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。